

兵庫・明舞団地に住んでみる

編集委員 嶋沢 裕志 (55)

②

高齢化ニュータウン

車は団地周辺を配達ボランティアの慎重な運転で回っていく。積み込んだ10個の弁当箱の音をカタカタ響かせながら……。昨年12月7日午前11時、明舞団地（兵庫県明石市）で高齢者向け食堂・配食サービスを手掛ける「NPO（非営利組織）ひまわり会」代表の入江一恵さん（80）の配食に同行した。

「ごめんください。ひまわりです」。風呂敷に包んだ弁当を抱えながら、小柄な入江さんが元気に階段を上っていく。戸建て住宅に住む糖尿病の70歳代の独居婦人は「このお弁当がいつも楽しみで」と玄關先でニッコリ笑った。しかし、巡回中、足が不自由で出て来られない老人もあれば、家族の留守中に「つらい」と泣き出す高齢婦人もいる。

10軒を回って店に戻ったのは午後1時半。食堂で昼食をとり、2時から4時出発の夕食の配食準備に取りかかる。月・火・木・金の週4日営業とはいえ、入江さんの起床は朝5時。目が回る忙しさだ。

平均67歳のNPO



ボランティアメンバーと一緒に調理の現場に立つ入江一恵さん（写真）高谷隆

配食で見回る「老々介護」

入江さんを最初に取材したのは11月17日。休業日の静かな店内で、じっくり話を聞いた。「配食は入院か退院か、すれすれの所にいる人たちの見回りなんです」。ズシリと心に響いた。

団地の空き店舗で「ふれあいお食事処 明舞ひまわり」が営業を始めたのは2003年10月。04年1月には配食もスタートした。

初めは商売敵とみる地元店もあった。しかし、有機・減農薬、手づくりへの徹底的なこだわりが売り物。配食者を亡くし何も食べられなかった男性が、家庭の味で調子を取り戻した、と感謝する。配食を受けるうち元気が出て、団

地の3階から歩いて通えるようになった老婦人もいる。当初1日40食程度だった実績も、今は120食。調理・配送ボランティアも17人から40人に増えた。報酬は1日数百円とわずかだが、厨房は笑い絶えない。「まさに老々介護ですけど、ひまわり狂騒曲をみんな楽しんでいきます」。平均年齢67歳の元氣集団だ。

求心力は、入江さんの人柄に負うところが大きい。高松

市生まれの入江さんは戦後、大阪府女子専門学校を卒業後、上京、青年運動に携わり、結婚後は夫の淳さんと栃木県、神戸で教員生活を送った。

高校の家庭科教師を務め、兵庫女子短大で調理学、高齢者介護論などを教えていた1989年に淳さんと死別。直後、北欧の福祉先進国を訪れ、理想的な「宅老所」を作る夢が膨らんだ。阪神大震災後は神戸市でボランティアを体験。自宅のある明石市で老人の面倒をみるうち「明舞ひまわり」構想が浮上。全国の知人に呼びかけると、協賛金や特産品が各地から続々と届いた。熱い思いがこみ上げてきた。

空き店舗の活用 兵庫県は2003年、明舞団地の空き店舗を活用した団地再生モデル事業を募集。特定非営利活動法人「ひまわり農業クラブ」が応募。助成金を得て、NPOひまわり会が同クラブと連携し「ふれあいお食事処 明舞ひまわり」の営業を始めた。09年度の実績は1万9274食。ちなみに明石市が行っている会食（09年度で1万2824食）の事業規模をしのぐ。

「倒れてもいいけど死んではダメって、みんな言うんです」。入江さんが爆笑した。朝7時5分明舞団地着のバスには、手荷物をいっぱい提げた入江さんの姿が、いつももある。